

鞍馬におけるマジャール・シェピンデルについて

—その課題性と形態的構造—

山下 芳 男*

(1978年7月6日受理)

I 緒 言

体操競技における1970年代の鞍馬の両足系の発展はまさに驚異的であり、「ここまで技術が長足の進歩をとげると、たて向きの技か横向きの技か、あるいは上向きの技か下向きの技か判断がつきにくくなる。すなわち、一つの複合技の中に、いろいろな中間的要素が入りこんできて、それが技術的に不可欠の内容をもつとなると、あるまとまりとしての単位が混乱してくる。さらに、王座争奪の主役たちの演技は、ほとんど中間旋回が消失してしまうので、複合技はどこで次の複合技に接続しているのか判断がむずかしくなっている。」¹⁾ また、「世界の鞍馬技術は、もはや従来の採点方式では手に負えないところまできているといえよう。鞍馬だけは、全く新しい採点法を確立しなければ、上位選手の優劣判定の資料は正しく求められないようになるであろう。」²⁾ という状況にあり、両足系の技の理解に対し、根本的な見直しの必要性が生じている。ここでは、現在の鞍馬の第一人者であるハンガリーのゾルタン・マジャールが開発した革新的な技と考えられるマジャール・シェピンデル (Magyar-Spindel)³⁾ に焦点をあわせ、その課題性と形態的構造について考察し、両足系の技の理解に資そうとするものである。

II 技の課題性と形態的構造に関する問題

技の課題性と形態的構造に関する問題について、吊輪の後振出しと第16回ドルトムント世界選手権における女子跳馬の規定演技をとりあげて簡単に考察する。

従来肩転位といわれた後振出しの課題性は、「雄大な前振りをするために、逆懸垂から後に高く振り出すことである」⁴⁾。従来の技術では肩の位置が低く(図1)、形態的構造上肩転位せざるをえなかったのであるが、技術開発によって肩の位置が高くなり(図2)、結果的に肩転位しない後振出しが現われるに至って、改めてその課題性が問われたのである。そこで、肩

* 岩手大学教育学部

1) 文献(1)117頁

2) 文献(1)117頁

3) 文献(2)8頁

4) 文献(9)55頁

転位を伴った後振出しも、肩転位を伴わない後振出しもその課題性には変わりはなく、肩転位は技術性に伴う形態的構造上の問題であることが明らかになったのである⁵⁾。

第16回ドルトムント世界選手権大会の女子跳馬の規定演技は、厳密に解すると直交する鉛直

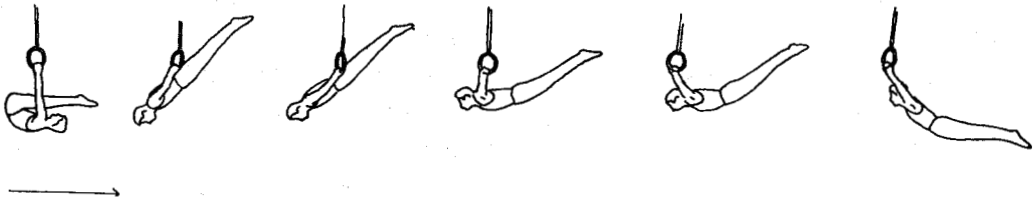


図 1 肩の低い後振出し (肩転位する)

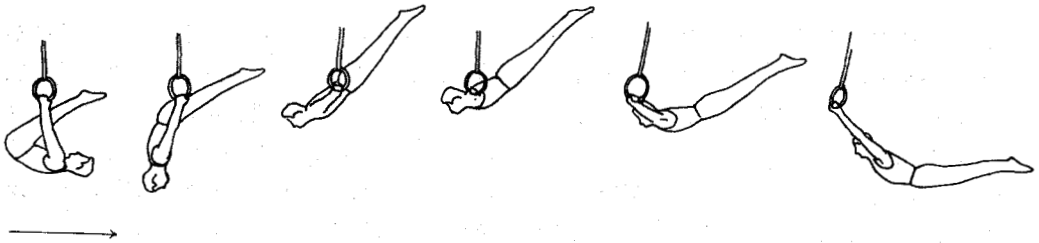


図 2 肩の高い後振出し (肩転位しない)

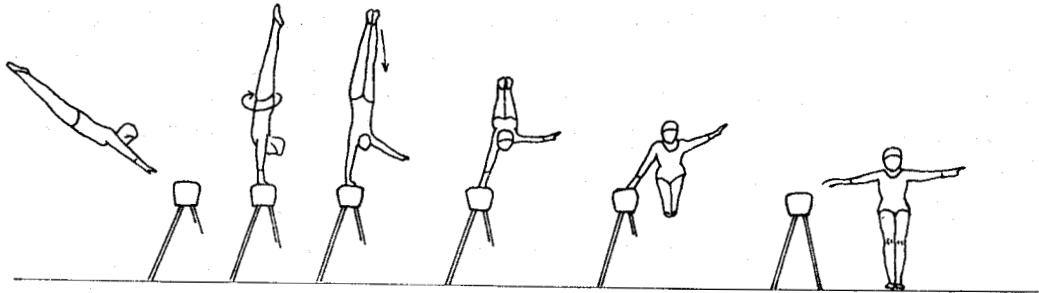


図 3 倒立 1/4 ひねり下り

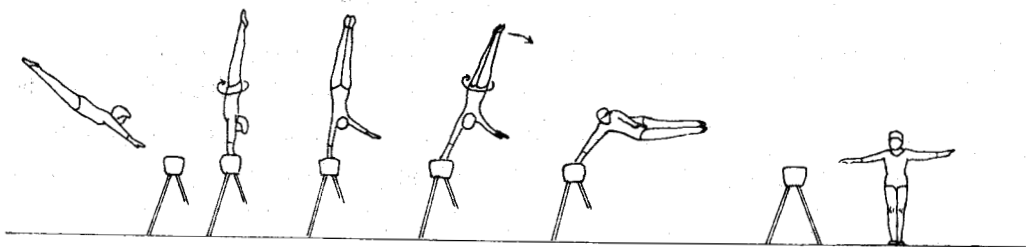


図 4 倒立 3/4 ひねり下り

5) 文献(9)56頁

運動面に行うべき⁶⁾ところを(図3), 実際は同一鉛直運動面に行い(図4), 審判員が規定解説違反と気付かずに問題にしなかった⁷⁾ところをみると, その課題性を肩部の \uparrow 転向と捉えていたと考えざるをえない。この課題性に基づいて直交する鉛直運動面に行なったときは \uparrow ひねりですみ, 同一鉛直運動面に行なったときは形態的構造上 \uparrow ひねりを伴うことになるのであるが, 一般に鉛直運動面に行なわれる技の長体軸のひねりは, 課題性の一要素となるところにその問題点があったと考えられる。

以上のように技の理解のためには, その課題性と形態的構造上の問題を明らかにすることは重要であると思われる。

Ⅲ 両足系の課題性と形態的構造

マジャール・シュピンデルを考察する前に, 複雑な形態的構造をもつ両足系の理解のために, まず, 両足系の基本となる技である両足旋回について, さらに両足系の中核的技である転向技について, その課題性と形態的構造を明らかにすることにする。

1. 両足旋回

両足旋回の課題性は「前の方向を変えないで, 両足を水平運動面に回す」⁸⁾ことであるとえられる。勿論, 両足系の回転方向は, 右, 左の二方向があり, その形態的構造は同じであることはいうまでもない。我々はこの課題性に基づいて両足旋回を行ない, また, 運動経過がその課題性を果たすと認めるとき, 我々は両足旋回が行なわれたと判断するのである。このように両足旋回の課題性は簡明に捉えられるが, その形態的構造は複雑である。

両足旋回は正面支持(図5-1)→両足入れ(図5-2)→背面支持(図5-4)→両足抜き(図5-5)→正面支持という経過をもつ循環運動である。前を不変としてという課題性が問題にされるのは, 頭, 腕, 肩の部分であり, この部分を支持部と考える。また, 両足を水平運動面に回すという課題性が問題にされるのは, 支持部を除いた体部分であり, この部分を回旋部と考える。このように支持部と回旋部に分けて考えることは, 両足系の形態的構造の理解を容易にするものと思われる。

支持部の向きを固定して回旋部を水平面に回すということは, 支持部と回旋部の間に回転方向と同一方向のねじれが生ずることは自明である。すなわち, 右旋回のときは支持部と回旋部の間に右のねじれが生ずる。これを解消するために回旋部の左ひねりが必要となる。つまり,

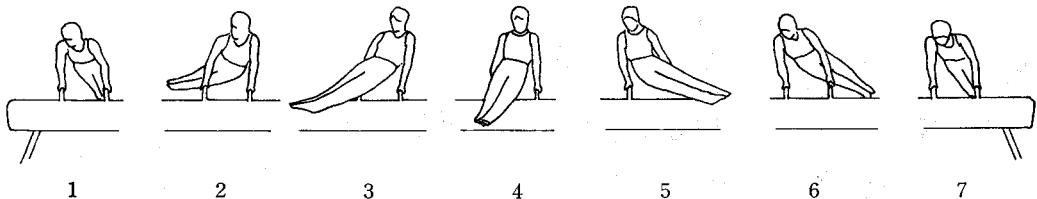


図 5 両 足 旋 回

6) 文献00185頁

7) 文献00185頁

8) 文献00323頁

一回の右旋回の間に回旋部の左一回ひねりが行なわれていることになる。技術的にはこの一回ひねりは、入れ局面では足先からひねりを先行させ（図5—2）、抜き局面では上から足先の方へねじれを解消させる（図5—6）操作で解決されている。このように回旋部のひねりは、技の課題性に必然的に伴う形態的構造上の問題であると考えられる。

2. 転 向 技

「＜転向＞は体が水平面に運動し、かつ前の方向を常に変化させて行なわれる運動課題を表記する基本語」⁹⁾であり、鞍馬において理に行なわれている転向技は、上向き、下向き、或いは正転向、逆転向何れにおいても回旋部の回転方向と同方向の支持部の転向、すなわち、右旋回では支持部の右転向がその課題性の中核となっていると考えられる。この意味において両足回旋技群、移動技群¹⁰⁾とは課題性を異にしているといえる。

さてその形態的構造であるが、右旋回における右転向技で、支持部の転向と回旋部の回転が全く同調して行なわれるとき、例えば、下向き正転向（図6）、或いは上向き逆転向では、支持部と回旋部との間のねじれは生じない。すなわち、支持部の $\frac{1}{2}$ 転向の間に回旋部の $\frac{1}{2}$ 回転が行なわれるとき、支持部と回旋部との間のねじれは生じない。従って、回旋部のひねりの必要はこの場合にはないのである。また、支持部が $\frac{1}{2}$ 転向する間に回旋部が1回転する技、例えば、上向き正転向移動（図7）では、支持部と回旋部との間に $\frac{1}{2}$ 回のねじれが生じることになり、回旋部の半ひねりによってこれを解消している。さらに、支持部が $\frac{1}{2}$ 転向する間に回旋部が1 $\frac{1}{2}$ 回転する技、例えば、下向き逆転向（図8）、或いは上向き正転向では、支持部と回旋部との間の1回のねじれを解消するために、回旋部の1回ひねりを伴うことになるのである。従って、これらの技の課題性は、回旋部の回転方向と同方向の支持部の転向を中核に、支持部の転向形態としての正転向、逆転向、転向時の回旋部の姿勢規定としての上向き、下向きなどによって示され、回旋部のひねりの有無、多少は、形態的構造上課題性に必然的に伴う事柄であ

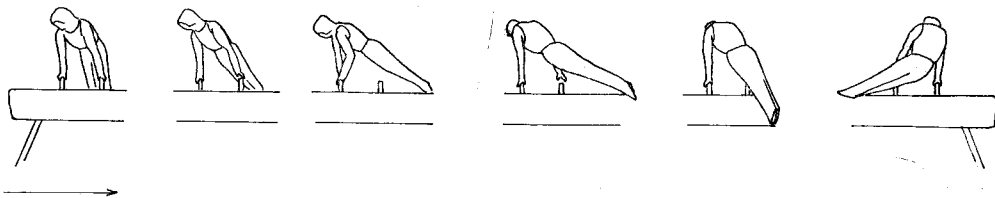


図 6 下向き正転向

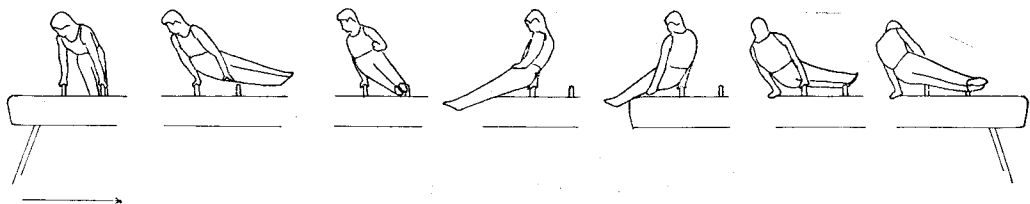


図 7 上向き正転向移動

9) 文献(9)61頁

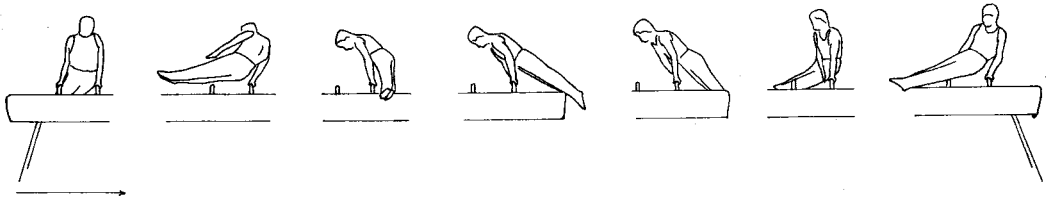


図 8 下向き逆転向

ると考えられる。

以上のように、両足系の技は、回旋部が常に水平運動面に同一方向に回されていることを課題の基本としており、課題性の中核は支持部にあると考えられる。また、鉛直運動面に行なわれる技の長体軸のひねりは課題性の一要素となるが、両足系の技における回旋部のひねりは、課題性に必然的に伴う形態的構造上の問題であると考えられる。

Ⅳ マジヤール・シュピンデルの課題性と形態的構造

上述のことをもとに本論の目的とするマジヤール・シュピンデルの考察に入る。

従来の転向技は、何れも支持部が回旋部の回転方向と同方向に転向していることはすでに述べた。これに対し、マジヤール・シュピンデルの画期的な特徴は、回旋部の回転方向とは逆方向の支持部の転向、つまり、右旋回における支持部の左転向ということである。勿論、この転

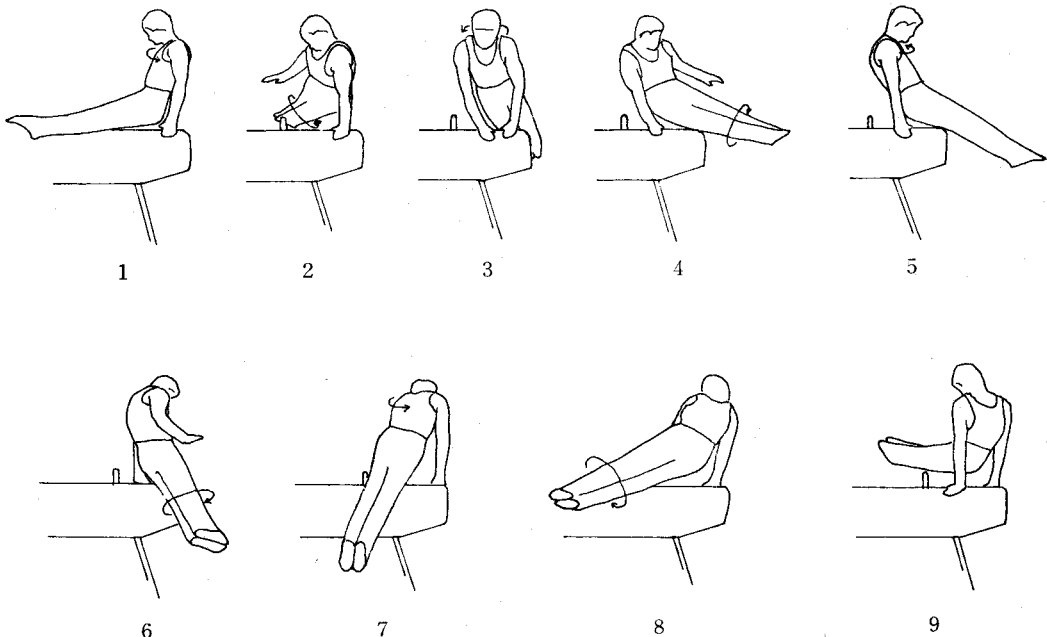


図 9 マジヤール・シュピンデル

向形態にも正転向と逆転向¹⁰⁾が認められる。この支持部の独特な転向形態を内ひねりと解する¹¹⁾ことは、回旋部の水平面運動を無視しているといわざるをえない。また、この技をひねり旋回¹²⁾として捉えるには、回旋部のひねりを伴う他の技との関連、或いはひねりの程度の判断とというような点においてその理解の煩雑さは免れないものと思われる。従って、マジヤール・シュピンドルの課題性の中核は、右旋回における左転向と捉えるのが妥当であると思われる。

馬端中向き右旋回から行なわれるマジヤール・シュピンドルの形態的構造は、馬端中向き背面支持(図9-1)→左↓正転向→馬端横向き正面支持(図9-3)→左↓逆転向→馬端外向き背面支持(図9-5)→左↓正転向→馬端横向き正面支持(図9-7)→左↓逆転向→馬端中向き背面支持(図9-9)であり、回旋部の右1回転の間に支持部の左全転向が行なわれるので、形態的構造上生ずる回旋部と支持部との間の2回のねじれを解消するために、回旋部の2回ひねりが加えられるのである。従って、この技は外見上とびはねているような素早い手さばきを示し、ひねりの印象が強いことからシュピンドルの名がついたと思われる。たしかにこの名称はその印象的な感じを的確に表わしてはいるが、そのひねりは課題性に必然的に伴う形態的構造上の問題と考えられ、馬端中向き右旋回から行なわれる左正転向に始まる左全転向と捉える方がこの技の理解を容易にするものと思われる。

V 結 語

以上考察したように、マジヤール・シュピンドルの課題性の中核は、旋回と逆方向の支持部の転向と考えられ、この意味において従来の転向技と対置できる。

また、水平運動面に行なわれる両足系の技の回旋部のひねりは、鉛直運動面に行なわれる技の長体軸のひねりとは異なる特異な要素であることを理解する必要がある。この理解に基づいて、マジヤール・シュピンドルの回旋部のひねりは、課題性に必然的に伴う形態的構造上の問題として捉えられるのである。

現在非常に複雑な様相をみせる鞍馬の技を理解することはそう容易なことではない。しかし、この理解に立てば、例えば、マジヤール・シュピンドルは馬端中向き右旋回から左↓正転向に始まっているが、横向き旋回から、或いは逆転向に始まる技を体系づけることができ、現に左馬端横向き左旋回から右↓逆転向と表記できる技が行なわれている。この転向の表記は、方向の規定詞ではなくその課題性を表わす語を付して、例えば、〈反〉↓逆転向のように表記する方が望ましいと思われる。

この論はマジヤール・シュピンドルに焦点をあわせたものであるが、さらに、今後益々発展するであろう両足系の技、複合技をも含めた全体系を見通した研究が必要であると思われる。

10) 文献(10)54頁

11) 文献(13)グラビア17頁

12) 文献(11)24頁, 115頁

参考文献

- (1) Bertram, A. 1967 : Deutsche Turnsprache 6. Auflage.
- (2) Göhler, J. 1975 : Die Magyar-Spindel. In : Olympische Turnkunst Nr. 3.
- (3) Herold, W. Göhler, J. 1973 : Handbuch der Turnsprache 2 Teil.
- (4) I. T. B 1968 : Wertungsvorschriften.
- (5) 金子明友 1964 : 体操術語における運動方向に関する研究, 東京教育大学体育学部紀要 第4巻.
- (6) 金子明友 1969 : 器械運動における技の体系化の基礎, 東京教育大学体育学部紀要 第8巻.
- (7) 金子明友 1971 : 体操競技教本Ⅲ鞍馬編.
- (8) 金子明友 1971 : 体操競技男子編.
- (9) 金子明友 1973 : 競技体操における技の表記, 東京教育大学体育学部紀要 第12巻.
- (10) 金子明友 1974 : 体操競技のコーチング.
- (11) 金子明友 1976 : 体操競技 世界の技術.
- (12) 日本体操協会 1964 : 男子体操競技採点規則.
- (13) 日本体操協会 1976 : 研究部報 39号.

Eine Betrachtung über die Bewegungsstruktur und ihre Aufgabe der "Magyar Spindel" am Seitpferd

YOSHIO YAMASHITA

Die technische Verbesserung des Kriesens beider Beine entwickelt in den letzten Jahren mehr und mehr die Übungsteile und -verbindungen am Seitpferd. Vor allem wird Magyar Spindel als die typische Übung angeführt. Aber es ist schwer, Magyar Spindel zu begreifen, denn sie hat eine sehr komplizierte Bewegungsstruktur. Daher werden wir erst eine kurze Betrachtung über die Bewegungsstruktur und ihre Aufgabe des Kreisens beider Beine und der Wendeschwünge (z.B. Tschechenkehre, Suisse double) anstellen.

Es ist die Aufgabe des Kreisens beider Beine, daß der Turner seinen oberen Körperteil (Kopf, Arme, Schulter) keinen Wendeschwung macht, während er seinen unteren Körperteil (Hüfte, Beine) in horizontaler Ebene kreist. Da die Schraube zwischen dem oberen Teil und dem unteren Teil des Körpers dabei gemacht wird, erfolgt die Drehung um die Längsachse innerhalb des unteren Teils, um sie zu lösen.

Es ist die zentrale Aufgabe des Wendeschwungs, daß der Turner den Oberkörper nach der gleichen Richtung des Kreisens dreht. Da keine oder wenigere Schraube zwischen dem Ober- und Unterkörper dabei entsteht, dreht der Turner den Unterkörper selbst nicht (z.B. Suisse double), oder erfolgt nur die dem Schraube entsprechende

Drehung des Unterkörpers selbst (z.B. Tschechenkehr).

Deshalb stellt sich heraus, daß die Schraube des Unterkörpers selbst nicht eine Frage der Aufgabe der Übung, sondern eine der Bewegungsstruktur ist. Wir müssen diese Schraube des Unterkörpers selbst von der Drehung um die Längsachse unterscheiden, die innerhalb der Übung in senkrechte Ebene erfolgt (z. B. Salto rückwärts mit Drehung), denn sie ist eine Komponente der Übung.

Auf Grund der obenerwähnten Betrachtung sei eine Betrachtung über die Bewegungsstruktur und ihre Aufgabe der Magyar Spindel behandelt. Es ist die spezifische, epochemachende Aufgabe der Magyar Spindel, daß der Oberkörper nach der Gegenrichtung des Kreisens gedreht wird. Diese Drehung vermehrt die Schraube zwischen dem Ober- und Unterkörper, darum erfolgt 1/1 Drehung des Unterkörpers selbst während der 1/2 Drehung des Oberkörpers (die schnelle Drehung des Unterkörpers selbst würde "Spindel" genannt). In gleicher Weise ist die Drehung des Unterkörpers selbst nicht eine Frage der Aufgabe der Übung, sondern eine der Bewegungsstruktur. Auf Grund dieser Betrachtungen kann Magyar Spindel vom Standpunkt der Systematik aus zur Gruppe der Wendeschwünge nicht gehören.